

原発過酷作業 健康置き去り

今年6月に福島第一原発を視察したこともあり、中日新聞11月6日の特報「原発過酷作業 健康置き去り」に注目した。原発構内で、多くの車が放置されていたのが気になっていた。こんな過労死事件につながっていたとは。それにしても、東電という会社の酷さに怒りが込みあがる。記事を抜粋して紹介したい。



リードから一東京電力福島第一原発で車両整備作業に従事し、いわき労働基準監督署に長時間労働による過労死と認められた福島県いわき市の自動車整備士、猪狩忠昭さん=当時(57)=は昨年10月に亡くなる直前の半年間、全ての月の残業時間が過労死ラインとされる80時間を超えていた。労災認定では原発敷地内への往復に要した時間も労働時間として認められ、原発事故後の現場の特殊性も考慮されたとみられる。

遺族らによると、猪狩さんの体調が急変したのは、昨年10月26日の昼休み後。全面マスクや防護服を着用し、同僚と車で現場に着いた直後に意識がなくなり、体がけいれんし始めた。すぐに敷地内の救急医療室に運ばれたが、既に心肺停止の状態。救急車で敷地外の病院に搬送され、約1時間半後に死亡が確認された。

その直後、東電は猪狩さんの死を「病死で作業と因果関係はない」と発表した。後日、インターネットで東電の記者会見を見た猪狩さんの妻(52)は衝撃を受けた。というのも、猪狩さんは亡くなる1年前に心臓手術を受けたものの、1カ月前の診察で「問題なし」と確認されたばかりだったからだ。会社からも「労災ではない」と言われた。

妻は「変わり果てた夫に再会した時、いつもは穏やかな顔が苦しんで涙の跡もあった。なぜ死ななくちゃならなかったのか。私と娘が死亡確認もできていないうちに、東電が『作業と因果関係はない』と発表したことはショックだった」と涙ぐむ。納得できず、自分の妹と関係者証言や記録を必死にかき集めた。東電に医療室のカルテ開示や医師の面談を求めたが、協力は得られなかった。しかし、タイムカードなどから100時間を超える異常な長時間労働が発覚。作業の過酷さも思い知らされた。

東電は今年9月末までに、登録された敷地内専用車両、1112台すべての整備を終える作業工程を指示していた。他の現場の作業員は「工程は発表されると絶対。何があっても間に合わせるようせかされる」と証言。別の作業員も「作業中は水分補給もトイレも行けない。事故は起こすな、熱中症やけが人は出すな、でも東電や国が発表した工程に間に合わないから急げ、と言われる」と話す。

事故後の原発へのアクセスや敷地内での待機なども通常とは全く異なる。猪狩さんは

午前4時半前に出社。それから同僚と共に車で約1時間半かけて福島第一原発に行き、夕方、作業後に帰社し、午後6時ぐらいまで仕事をしていたという。

ある下請け作業員によると、原発へは許可車両しか行けないため、乗り合いのバスや車で行くしかない。避難区域もあり、通れる経路も限られるため、朝夕の渋滞はひどい。それを避けるため定刻より1時間ぐらい早く到着するようにしていたが…

今は敷地全体が放射線管理区域のため、建屋の休憩所で休む時も、敷地外に出る際も汚染検査を受けなければならない。ある作業員は「工事車両で外に出る時は一時期、2時間待ちだった。高線量下の作業ほど、作業時間は短いけど待機時間が長く、緊張度も高い」と話す。

こうした現場の特殊性が、今回の認定でどこまで考慮されたかは分からない。しかし、会社と原発の間の移動時間も労働時間として認められたことは原発作業員にとって画期的だ。

(2018年11月22日)